開催地名：香川県高松市	
開催日時	令和３年１月 12 日（火）　　10：00 ～ 12：00
開催場所	高松市役所（オンライン開催）
語り部	神谷　未生　　（岩手県大槌町）
参加者	高松市民　62 名（うち会場 45 名、リモート 17 名）
開催経緯	当市は、南海トラフ地震を始めとした大規模地震に備えているものの、被災経験に乏しいため、自然災害を自分事として捉えることが難しいと認識している。市民の防災力及び防災意識の向上、地域における防災力の充実・強化を図りたいと考えている。また、災害から受ける影響やニーズにおける男女の違いや多様性についても認識を深めたい。
内容	（１） はじめに 私は名古屋市出身で、米国の大学を卒業後米国の正看護師の資格を取得し、途上国で医療活動を行っていた。ベトナムで活動中に東日本大震災が発生し、日本へ帰国後に、国際ＮＧＯ職員として岩手県大槌町に派遣され、その後大槌町の男性と結婚して、語り部活動の運営、大槌町独自の課題を扱ったワークショップの展開、住民との交流を主体とした復興ツーリズム等を行ってきた。今日は大槌町で起こったことについてと、女性の視点からみた震災の影響についてお話ししたい。 （２） 東日本大震災の被災状況 2011 年（平成 23 年） ３月 11 日 14 時 46 分、マグニチュード 9.0 の東北地方太平洋沖地震が発生し、大槌町も強い揺れに襲われた。加えて、この地震が引き起こした大津波とそれによって発生した火災（完全に鎮火したのは 2 か月後）により、町は壊滅的被害を受けた。死亡者は 870 人を数え、行方不明者は 416 人、震災関連死が 52 人となっている。震災発生時の町の人口は 15,994 人であったが、昨年 11 月末現在の人口は 11,426 人と、4,568 人の人口減（減少率 28.6%）となっている、 物的被災状況は、家屋全壊が 3,359 棟、大規模半壊・半壊等が 713 棟、津波による浸水面積は 431 ヘクタールに及び、宅地浸水率が 52%、商業地浸水率は 98%に及んだ。町の経済が壊滅し、家も仕事場もなくなった方が多数発生した。 この地震と津波は平日の日中に発生したため、自宅にいたのは高齢者や幼児といった災害弱者が多かったことも被害が大きかった要因の一つである。住民の 15%が死亡したという統計結果が出ているが、発災時に自宅にいた住民の死者数の割合はもっと跳ね上がるはずである。防災訓練や避難訓練は、通常土・日に家族全員が参加して実施されるケースが多いが、あらゆるパターンを想定した訓練の実施を推奨したい。

	岩手県内の小・中学校では、発災時に校内にいた児童・生徒については全員が無事だった。日頃から教職員や児童・生徒が、避難することについてしっかり準備していた成果と言える。津波の被害を受けてきた三陸の太平洋沿岸の住民にとっては、今後も継続して災害に対する準備を行っていかなければならない。 （３） 女性の視点からみた震災 男性だからとか、女性だからとか、性別によってその言動を区別したりすることはよくないが、家庭での決定権は男性が握っていたり、子育てや介護は女性の役割だという考えもまだまだ根強く存在する。災害時に当てはめてみると、例えば一般的に男性より女性の方が家庭生活に密着に関わっているため、災害時に避難する際にも家族や知人、近所の人たちのことを気にかけたり、避難の準備を周到に行ったりする傾向がある。避難所でも、炊き出しは女性の役目となっていたり、避難所のリーダーは男性がほとんどであることから、女性特有のニーズの把握や気遣いという部分では改善の余地が多い。 一般的には、女性の方がコミュニティの構築が上手であり、実際にそこから発展した取り組みも多い。この点を考慮し、組織や地域団体の意思決定をする役割に女性を含めていくことが望ましいと言える。緊急時には普段やっていることしかできないため、普段から女性の視点で考えることも必要なのは明白である。そして個人としても、普段から日常的に周囲の人たちとコミュニケーションをとり、互いに頼る関係を構築していくことが、震災から 10 年が経とうとしている現在、必要なことだと思う。
開催地より	豊富な写真を見ながら、わかりやすくお話しいただいた。女性の強み（近所付き合い、声かけなど）を生かした地域防災の啓発や、女性（年代問わず）の地域防災への参画促進に向けた取組について進めていきたいと思う。